



[果樹部門]

[農業研究所ホームページへ](#)

2. 「岡山 PEH8号」の収穫判断部位と収穫開始時期の果実硬度の目安

[要約]

「岡山PEH8号」の果実は、果実チーク部で収穫適期を判断するのが適当である。樹冠果実チーク部の緑色が退色し始めた後、果実硬度が2.0～2.5kgf程度に軟化した頃がその樹の収穫開始の目安となる。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 果樹研究室

[連絡先] 電話086-955-0276

[分類] 情報

[背景・ねらい]

「岡山PEH8号」（9月上旬収穫の極晩生種）は、他品種では一般的な果皮の緑色の退色程度を観察する方法だけで収穫すると、熟度のばらつきが大きく、酸味の強い未熟な果実や過熟な果実が含まれることが多い。酸味の強い果実は敬遠される恐れがあるため、酸味が弱まった果実を収穫するのが望ましい。そこで、本品種における成熟様相と食味、果実品質との関係を調査し、緑色の退色程度による収穫法を補完する収穫適期の判断方法を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 本品種は、果実の縫合線の反対側から縫合線に向かうように果肉の軟化が進む(図1)。その中間にあたる、チーク部の緑色が退色した時期の果実硬度と官能による熟度判定との相関関係が最も高く、収穫判断を行う観察部位として適当である(表1)。
2. 果実チーク部の果実硬度が樹上で2.0kgf未満の果実は、落果や水浸状果肉褐変症がみられる過熟な果実の割合が高い(図2)。また、2.5kgf以上の果実は果汁pHが低い。
3. 果実チーク部の緑色が退色し始めてから、果実硬度が2.0～2.5kgf程度の基準で収穫すると、過熟果の割合が少なく、果汁pHがやや高い(酸味がやや減じる)状態で収穫が可能であり、常温で3日後には適熟となる(図2、図3)。

[成果の活用面・留意点]

1. 樹のなかで成熟が最も早い樹冠最上部の果実の緑色の退色を確認して収穫し、複数個の果実硬度を測定する。果実硬度が2.0～2.5kgf程度に軟化していることを確認してから、速やかにその樹の収穫を開始する。
2. 果実硬度は、果実硬度計(KM5円錐型、藤原社製)を用いる。円柱型の硬度計を用いる場合は、2.0～4.0kgf・cm⁻²程度が収穫適期である。
3. 収穫期間は他のモモ品種と同様に2日間隔で収穫を行い、成熟の早い樹冠上部から、着果位置や果実袋の膨らみ、それぞれの果実チーク部の果皮の緑色退色程度などを参考に、他の品種と同様に樹全体を7～10日程度かけて段階的に収穫する。
4. 果実袋は白黒有底袋を用い、果実袋を裂開して果実チーク部の果皮色を観察する。収穫時期に達していない果実は、果実に直接光が当たらないように再度、果実袋をしつかりと閉じる。
5. 本品種の苗木は岡山県内に限定して販売されている。



[具体的データ]

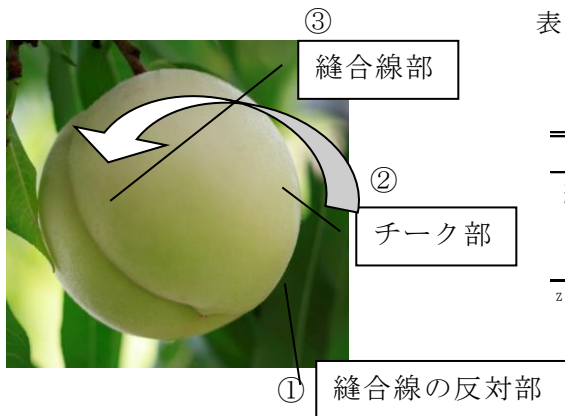


図 1 「岡山 PEH 8 号」の成熟の概念図
^z ①～③の順に軟化する

表 1 「岡山 PEH 8 号」の緑色退色判定による収穫果における部位別の果実硬度と収穫 3 日後の官能による熟度評価^zとの関係（2016 年、n=240）

調査部位	単相関係数 (r)	判定	判定理由
縫合線の反対部	-0.567	○	果皮色との相関が低い
チーク部	-0.606	◎	果実硬度と相関高い
縫合線部	-0.517	△	部位の退色が見にくい

^z 官能による熟度評価は（1：未熟～、3：適熟～、5：過熟）で評価

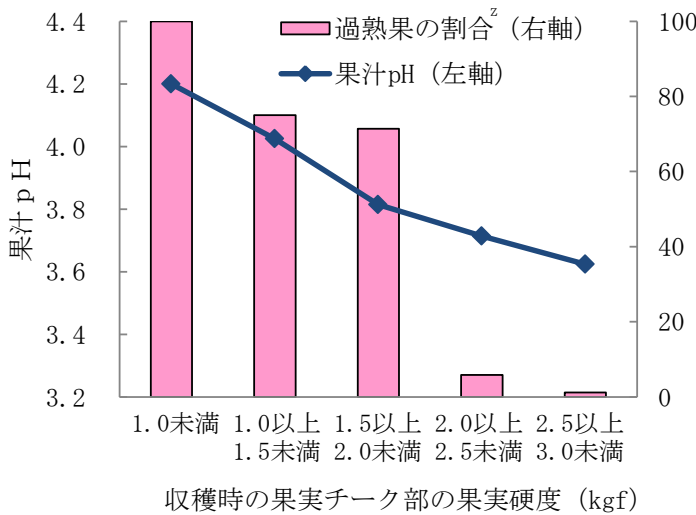


図 2 「岡山 PEH 8 号」における果実チーク部の緑色退色判定による収穫時の果実硬度と果汁 pH との関係（2016 年）
^z 落果や水浸状果肉褐変症がみられた果実を過熟果とした割合

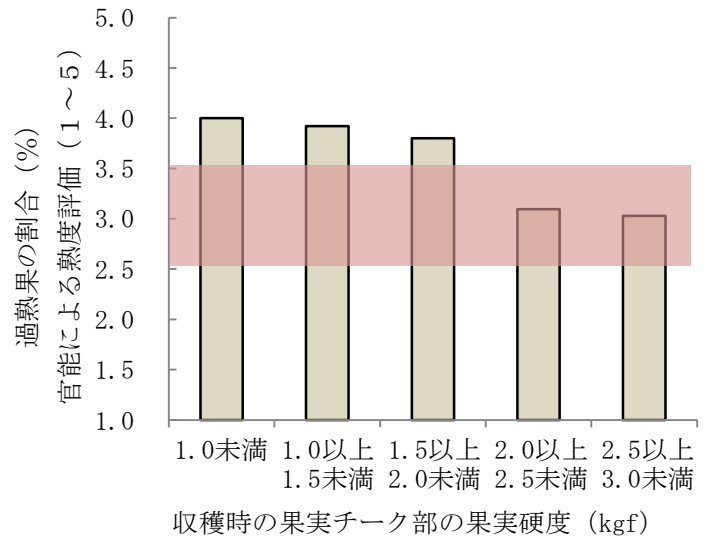


図 3 「岡山 PEH 8 号」における果実チーク部の緑色退色判定による収穫時の果実硬度と収穫 3 日後の官能による熟度評価との関係（2015 年）
^z 図中の網掛けは官能熟度が優れる 2.5～3.5 の範囲を示す

[その他]

研究課題名：①モモのオリジナル品種の高品質安定生産技術の確立

②岡山県次世代フルーツおよびオリジナル新品種の高品質安定生産と東アジア地域へのプレミアムフルーツ輸出促進

予算区分：①県単、②受託

研究期間：①2012～2020年度、②2016～2018年度

研究担当者：樋野友之、荒木有朋、藤井雄一郎

関連情報等：1) [日原ら \(2014\) 岡山県農業研報、5 : 13-16](#)

2) [平成26年度試験研究主要成果、11-12](#)